

中国系アメリカ人女性の表象—テレビドラマ *Ally McBeal* の事例

から—

Representation of Chinese American Woman on the U.S. Television Series, *Ally McBeal*

俣野 裕美

Yumi MATANO

同志社大学社会学研究科 Doshisha University Graduate School of Social Studies

要旨・・・本研究では、アメリカのテレビドラマ、*Ally McBeal* に登場する中国系アメリカ人女性の表象が、ドラゴンレディというアジア系女性のステレオタイプと、それには該当しない側面から構成されていることを明らかにした。前者の表象は、アメリカ国家成立の合理的説明を行っており、後者の表象は、アジア系女性に対する差別、偏見の解消を促進する社会的機能を内包している。

キーワード テレビドラマ、中国系アメリカ人女性、他者表象、ステレオタイプ

1. はじめに

近年、アメリカのテレビドラマは世界中の人々の関心を引き付けている。DVD や関連商品の売れ行きも好調で、巨大なマーケットを形成している。しかし、このような人気とは裏腹に、その内容に関しては様々な議論が巻き起こっており、特に差別や偏見を助長するような人種やエスニシティの描かれ方を巡っては、多くの非難さえなされている。アメリカのメディア業界では一般的に、白人が優位的な立場に立つ傾向にあるため、白人以外のマイノリティ達は、しばしば不利な状況に置かれやすくなる。中でも、アジア系の人々が映画やテレビドラマ上に登場することは非常に稀であり、その表象のされ方は、常にネガティブ、ステレオタイプ的であるとの批判がある。そこで本発表では、アメリカのメディアにおけるアジア系表象の一端を捉えるため、人気テレビドラマ、*Ally McBeal* (邦題『アリーmy love』) を事例として取り上げ、作中にレギュラー出演する中国系アメリカ人女性^{註1}、リン・ウー (以下、表題以外はリンと表記) の表象を分析し、その社会的意義を明らかにする。

(1)*Ally McBeal* について

Ally McBeal とは、1997年9月から2002年7月にかけて、アメリカのFOXで放送された、David E. Kelly 脚本・制作のラブ・コメディドラマである。放送時間は21時から22時(東部時間)までで、全111話のエピソード(5シーズン)がある。ボストンにある弁護士事務所働く弁護士、アリー・マクビール(以下、アリーと表記)を主人公に、彼女と同僚の弁護士達の人生がコメディタッチで描かれる。ストーリー中に、仕事、恋愛、結婚生活、同僚の死、社会問題など様々な要素が組み込まれているところや、弁護士達が熱弁を振るう本格的な法廷シーンはこのドラマの見所といえよう。エミー賞など数々の賞を獲得しており、アメリカでの人気から日本でもNHK総合で放送された。このような人気に加え、テレビや映画に登場する機会の少ない中国系アメリカ人女性がレギュラー出演を果たした本作品は、アジア人女性についてのイメージ形成に影響を与えるドラマであるといえ、彼女の表象について考察することには意義があると考えられる。

(2)先行研究

リンの表象については、いくつかの学術的研究が行われている。これらの研究では、リンに「ドラゴンレディ」という攻撃的で邪悪、ミステリアスな性的魅力を兼ね備えた、東洋のアジア系女性のステレオタイプ(Herbst 1997)が付与されているとの指摘がなされている。このステレオタイプはアメリカ社会では非常に馴染み深いもので、これまでに幾度となくメディア上で描かれてきた。とりわけ、ドラゴンレディとして強烈な印象を与えたのが、Anna May Wong という中国系三世の女優で、彼女は1919年から61年にかけてアメリカやヨーロッパで約60本の映画に出演して名声を得た。後のアジア系アメリカ人女優のパイオニア的存在となった人物である。Shanghai Express(1932)など著名な作品に出演するも、エキゾチックな奴隷、売春婦、殺人犯などドラゴンレディを体現した役柄しか演じることができなかった。以降、多くのドラゴンレディ像がメディアに登場してきた。リンのドラゴンレディ性について、先行研究では次の要素が指摘されている。彼女は捲し立てるような口調で故意に人の気持ちを害するような発言を行ったり、少しでも意に沿わないことがあれば、怒りを撒き散らし、周囲を困らせたりしている。しかし、彼女の良心が痛んでいる様子はない。彼女が怒る時には獣の唸り声の効果音が挿入され、このような描写は、彼女の攻撃性を示すと論じられている。また、リンが同僚の前に姿を現す時には『オズの魔法使い』に登場する「西の邪悪な魔女」のテーマソングが流れるが、これらは彼女の邪悪さを表現しているとされている。加えて、彼女については他の登場人物に比べてセクシュアルな場面が多く描かれているが、この場面は照明や音楽を使って彼女のミステリアスな性的魅力が醸し出されるような演出がされている。また、アリーとリンが対立して口論に発展した時、CG技術によってリンが口から火を吹くシーンがあるが、これは文字通り彼女がドラゴンであることを示していると述べられている。(Praso 2006; Shah 2003; Sun 2003; Patton 2001)

(3)他者表象の性質

しかしこれらの研究は、リンがドラゴンレディであるとの観点に偏っている傾向にある。リップマン(Lippmann 1922=1987)が述べるように、人間の生活と理解は先有するイメージに左右されることが多い。故にテレビや映画などのメディア上においても、イメージが多用され、特に他者を表象する時には、イメージの中でもステレオタイプが頻繁に使われる。ステレオタイプとは、ある対象が本来持っている複雑な要素を単純化、固定化して表現したイメージのことである。しかしながら、他者の表象に関する研究で知られるホミ・バーバは、ステレオタイプには脆く曖昧な側面があるという。ステレオタイプとは人間の幻想の中で作られるが、その幻想は人の欲望や社会、歴史の影響を受けている。これらの影響の中で、ステレオタイプの他者像は、常に再構築、再表象される可能性があるのである。ある一定のステレオタイプの他者像が出来上がり、それが社会に流通したとしても、人の幻想や社会の中で作られるものである以上、それは非常に脆く、崩壊する恐れがあるのである。つまり、ステレオタイプとは不安定なものであり、変化の可能性に満ちたものといえる(Bhabha 1994=2005)。このようにみると、メディア上の他者表象を読み解くには、ステレオタイプとそれ以外の部分に注目する必要があることになる。本研究では、このようなバーバの論を基盤に置きながらドラマの全話を視聴して、彼女の表象を分析した。

2. ステレオタイプを付与されたリン・ウー

(1)脅威としてのリン・ウー

バーバの論を基にリンの表象を分析すると、リンは先行研究で述べられているように、ドラゴンレディとして表象されていることが分かった。以下では、先行研究で指摘された以外のリンのステレオタイプの表象について述べたい。彼女は既に示したように、攻撃的で横暴な性格である。そのため、彼女は周囲の人々を支配し、脅威を与える人物として描かれていた。それが顕著に示されているのが、リンが転職する時である。

彼女はストーリー中で、二度の転職を行っている。一度目は、企業家から弁護士に転職し、アリー達が勤務する弁護士事務所働くことになった時である。当初、企業家のリンは訴訟の依頼をするためにクライアントとして事務所に来ていた。そのうち、弁護士資格を持つ彼女は弁護士として働きたくなり、事務所の経営者、リチャードを誘惑して入社を許可させる。すると、事務所の弁護士達は、彼女が事務所を乗っ取り、自分達はその支配下に置かれるのではないかと危機感を募らせて猛反対し、入社を阻もうと画策する。法律に精通した弁護士が多数働く事務所が、彼女一人によって容易に乗っ取られて支配されるとは考えにくい。しかしドラゴンレディである彼女は、周囲にこのような脅威を抱かせてしまうのである。

二度目の転職の際も同様に、脅威としての描写がなされている。彼女は街で偶然に出会った州知事に、弁護士から判事への転職を勧められる。彼女は「リン判事“Judge Ling”」という呼称の響きに心を惹かれ、判事になることを決意する。その時の彼女は、悪事を企てるような薄ら笑いを浮かべており、背景に恐ろしい音楽が流され、これから何らかの波乱を巻き起こそうとしている様子が演出される。この場面は、彼女が判事になることでもたらされるかもしれない脅威を表現しているといえよう。また、彼女が初めて判事として裁判を取り行う時、リチャードとリンの親友で同じ事務所で働く、ネルが傍聴に来る。二人は彼女の裁判が始まる前、リンが判事になるのは、人類に対する悪ふざけであると冗談を言って笑い合う。この二人の会話は冗談であるのだが、冗談は話者の間で共有されている何らかの真実の部分や真実とされている前提がなければ成立しない。人類に対する悪ふざけという言葉は、人々をその手中に収めて弄ぶかのような印象であるが、二人の意識の中、ひいては視聴者の間に、彼女が人々を掌握し脅かす存在であるという考えが共有されているという前提の下にこのような発言がなされたのである。

このような脅威としてのリンの表象は、彼女のドラゴンレディ性に原因がある。転職によって彼女は、新しい世界に足を踏み入れる。リンは獐猛で攻撃的な性質を持つ、周囲とは乖離したドラゴンレディであり、いつ何時人々に危害を及ぼすかが予測できない他者である。このようなリンが新たな世界に足を踏み入れる時、周囲の人々は、自分たちの世界が脅かされるのではないかとその恐れを抱くのである。このような脅威としての表象は、彼女がドラゴンレディであるが故に採用され得た描写であるといえよう。

(2)抑制されるリン・ウー

リンの存在は周囲の人々に脅威を与えるものであった。このようにみると、彼女は横暴なまでに自由な言動を行うことができる人間のようである。しかし、彼女の行動を抑制しようとする人物がいる。それがリンの友人のネルである。彼女は大学時代共に法学を学んだリンの友人で、休日には共に出かける程の仲である。リンの言動は攻撃的であるため、周囲の人間の感情を傷つけてしまう恐れがある。その時、傍にいる同僚がそれを事前に防ごうとしてリンの言動を抑制する時があるのだが、その回数が一番多いのはネルであった。なぜネルにリンの行動を抑制する役割が与えられているのであろうか。ネルはリンの親友であるからだという解釈も可能であるが、ここにはそれ以上の理由がある。ネルの容姿は、白人、長身、ブロンドの髪の毛、美しい顔立ちと、古くからハリウッドが描き続ける「美人」の典型像であり、アメリカの理想の女性像である。ここに、アメリカを体現するネルが、アジアを体現するドラゴンレディ、リンを抑制するという構造が浮かび上がる。リンはドラゴンレディという危険人物であるため、完全な形で自由な行動は許されない。アメリカを体現する人物によって抑制されなければならないのである。メディア上ではリンのように危害を加えかねない他者を何らかの形で抑制するという手段が取られるわけである (Sun 2003)。こうしたことによって、視聴者の恐怖心を取り除き、ある種の安心感を与えることができる。つまり、アメリカを象徴するネルがアジアのリンを抑制しておけば、視聴者は安心してリンの攻撃的な言動を楽しむことができるのである。この抑制は、リンがドラゴンレディであるという理由から必然的に生まれたものであるといえる。

3. ステレオタイプではないリン・ウー

(1)優しさ

このようにリンはドラゴンレディとして表象されている。しかし、バーバの理論を基盤に考察すると、それには当てはまらない表象もあった。彼女には窮地に立って困っている人々を助けるべく尽力する、心優しい側面がある。以下では、その一例を紹介したい。

あるエピソードでは、白血病に侵された少年が、自らに残酷な運命を与えたとして神を訴えたいとアリーに申し出た。アリーは神を被告にすることは不可能であると即座に断り、少年を落胆させてしまう。しかし、それを見たリンは彼の願いを受け入れた。実際に神を訴えることは不可能であるため、代わりに少年とその家族が通っていた教会を訴えることにする。今まで寄付を行ってきた少年と家族に報いないのは道理に反しているとして、教会に白血病の試験薬の代金を出すように命じた。しかしその後、少年の容態が急変し試験薬を投与することなく、亡くなってしまった。リンは、アリーや少年の母親の前では強がるが、一人になると泣き崩れ悲嘆にくれる。このストーリーでは、リンは白血病の少年を救うために奔走しその死を悼むという、ドラゴンレディとは反する

心優しい側面を見せているといえよう。この他にも、リンは同僚が悲しんでいる時には勇気づけようとしたり、老人ホームでのボランティア活動を行ったりしているエピソードが挿入されている。リンは、周囲の人が困っていたら手を差し伸べようとする優しさを持った人物なのである。

(2) 仲間、友人として

攻撃的で、脅威さえ抱かせてしまうドラゴンレディのリンは、周囲から疎外された人物でもある。しかし、彼女が事務所の同僚の仲間、友人として描かれているシーンがある。それが街を歩く場面である。このドラマでは、登場人物達が街を歩きながら家路に就くシーンが頻繁に挿入されるが、この場面は彼らの心情を反映した象徴的なものとなっている。喜ばしいことがあった時には、同僚と談笑しながら帰ったり、賑やかな音楽を背景に踊りながら帰宅したりする。反対に悲しいことがあった時には、一人で肩を落として険しい表情で歩くという具合になる。街を歩くシーンは、登場人物の正直な心情が表れているのである。リンと同僚達が共に街を歩くシーンにも、彼らの素直な心情が反映されていると考えられる。以下、いくつかの例を挙げる。

夫と共にこの事務所に勤務していた弁護士、ジョージアは夫との離婚後に退職した。ジョージアは、夫と離婚したのは労働環境が悪かったからだと、事務所を訴えた。事務所のスタッフ達は彼女のこの行為に激怒し、全員で裁判に対応する。裁判は困難を極めたが、何とか事務所側が勝利する。裁判の後、ジョージアは退職して同僚達に会えない寂しさから裁判を起してしまったとアリーに告白する。アリーは、事務所の従業員の方も彼女が居なくなって寂しがっているのだと告げ、ジョージアと同僚の溝が埋まる。その後、リンを含む従業員全員で肩を寄せ合い談笑しながら帰宅する。このエピソードでは、従業員達が強い絆で結ばれた仲間であることが示されており、その中でリンは他の従業員と同じように笑顔で肩を寄せ合い、街を歩いている。この場面は、リンも強い絆で結ばれた事務所の大切な一員であるということを表している。この他にも、リンがアリーと夕食を共にした後、笑顔で会話を楽しみながら歩き、最後に頬にキスをして別れる場面や、女性従業員達と共に談笑しながら帰宅する途中、リンがアイスクリーム店を指さして、共に店に入るよう提案しているシーンもある。ここでのリンは、アリーや従業員達の友人として描かれている。これらの場面のリンは、ドラゴンレディ的な言動は見せていない。リンは事務所の仲間、友人でもあるのである。

(3) 訴訟社会への問題提起

リンは主要登場人物の中で唯一、判事の職に就いている。この職を通してリンは、アメリカの訴訟社会の一端を提示し、その改革の必要性を訴える人物として描かれている。上で述べた通り、彼女が判事の職を得たのは偶然によるものであった。しかしその後、彼女は自らが判事となることでどんなに瑣末なことにも市民がこぞって裁判に訴える、アメリカの訴訟社会の現状を正したいという意志も述べている。リンの言う通り、アメリカは訴訟社会である。アメリカでは、弁護士費用が比較的安く抑えられており、また勝訴すれば多額な賠償金を得られるという印象さえあることから、市民が些細なトラブルでもこぞって訴訟を起こすという事態が起こっている(長谷川 1988)。

作中でリンが受け持った訴訟は、日常生活で起こるような小さな揉め事のようなものであった。訴訟社会を容認していない彼女は、このような裁判を遂行しながら、辟易した態度を見せ、訴訟として妥当性のある裁判を求める発言を行っている。彼女は自らが判事になることで訴訟社会の一端を示し、それは容認できるものではなく、改革すべきであるというメッセージを発しているのである。つまりここでのリンは、訴訟社会への問題提起をする人物として描かれているのである。

(4) リン・ウーの表象

このように、リンはドラゴンレディとして表象されている一方、それには当てはまらない積極的な描き方もされていた。彼女は心優しい事務所の仲間、友人であり、アメリカの訴訟社会に対し問題を提起する人物でもあった。こうしたリンのステレオタイプには符合しない描かれ方は、ドラゴンレディの攻撃性や冷淡さという必須条件の下になされたものだと考えることもできるかもしれない。しかし、リンのこのような両面性は、彼女以外の女性登場人物も共有している。女性登場人物達も、激しやすく身勝手なところがある(Gina 1998; Hammers 2005)一方、純粋で傷つきやすい心を持ち、苦境に立った人を助ける側面もある。つまり、この作品では、人間がもつ二面性という複雑さを描きながら紡ぎだされているのである。このような構造を持ったドラマの中の一人として、リンも同様にドラゴンレディとそれ以外の二面の性質を持った女性として表象されているといえる。

4. リン・ウーの社会的意義

(1)ステレオタイプと差別

ドラゴンレディのステレオタイプは差別の観点からどのような問題点を抱えているのであろうか。彼女の表象は、肯定的に捉えることもできる。マイノリティである中国系アメリカ人が表象されること自体が、彼らの存在感を社会に訴えることに繋がるであろうし、横暴だが明確な自己主張をするリンは、主体性を持って人生を切り開く活発な人物像であるともいえよう^{註2}。しかし、ドラゴンレディが妖しい性的魅力を持った攻撃的な女性で、この人物像がアメリカ社会に流通している以上、中国系アメリカ人女性は一様にこのような性格を持った人間であると見なされ、様々な形で人種差別や偏見にさらされる恐れは否定できない。また、このようなステレオタイプに抗議する人々も存在する。メディアの提供するステレオタイプが必ずしも、差別や偏見と直結するわけではないが、問題を孕んでいることも事実である。

(2)ステレオタイプとアメリカ社会

リンの表象は、アメリカ社会においてどのような意義を持つのであろうか。ホール (1997) はステレオタイプ化とは、権力を保持する者が、権力を持たない者に対して行えることであるという。権力を持つ側をノーマルで好ましい「私たち」として構成し、権力を持たない側を逸脱者化するという。他者である中国系アメリカ人女性は「逸脱した他者」として社会の隅へと追いやられてしまう可能性があるのだ。

チャールズ・ビアードは、1787年当時のアメリカ合衆国憲法制定運動の原動力は公債を所有した、裕福な白人権力者の利益を保証することであったと述べた (Beard 1913)。ドラゴンレディ像はこのような憲法制定の原動力と矛盾しない。リンに攻撃的なドラゴンレディ像を付与することで彼女は逸脱者となり、「正常」な白人と「逸脱」した中国系アメリカ人という対立構造が生成される。すると、白人こそが主導権を握って社会を運営する義務を持ち、その結果の利益を獲得する権利がある「階層」ということになる。彼女をドラゴンレディとして表象することは、アメリカ国家成立の「合理的説明」とその存続と維持を正当化する社会的な機能を持つものだといえる。

(3)メディアの公益性

メディアは利益を追求する一企業であると同時に、より望ましい社会の建設に資さなければならない。つまり、メディアは「社会一般にかかわる利害のうち、人間社会にとってのプラスの方向に結びつく」(渡辺 1995) ように活動する、公益的活動という義務を負っているのである。メディアは熾烈な競争の中を勝ち抜いてその地位を保ち、向上させていかなければならないという現状の中にある。しかしながら、公益性の観点から考えると、メディアはただ利潤の獲得だけを求めて、高視聴率の取れるドラマを制作しておればよいというわけにはいかないわけである。無論、白人がその絶大な権力を維持してゆくことを暗に正当化するようなドラマを制作、放映する活動も認められるものではない。1947年に出された米国プレス会の自由調査委員会の報告書には、メディアが誤ったイメージで人物を描くと、民衆の判断まで誤ってしまうことになることと指摘されており、公平な描き方がなされなければならないと述べられている。アメリカ社会で脈々と受け継がれてきたドラゴンレディ像がリンに付与されていることは、公平な描き方であるとは考えにくい。その点でも、リンのドラゴンレディ像は、より良い社会の建設には結びつかず、メディアが負う公益性の責任を果たしているとはいえないだろう。

(4)リン・ウーのイメージの可能性

リンの表象は、上記のような問題のあるステレオタイプだけで構成されているのではなかった。彼女の積極的な表象は、これまでに行われてきたマイノリティ達の運動によるところが大きいと考えられる。アメリカでは1960年代、アフリカ系アメリカ人を中心に、様々なマイノリティ達が人種差別の撤廃や自らの権利を求めて活動を行った。公民権運動を通じて、制限はあるものの、社会の様々な局面で活躍できるマイノリティが増え、それに伴ってメディア表象に対する異議申し立ても盛んに行われるようになった。アジア系のメディア表象について調査し、問題点についてレポートする組織も誕生し、近年では主要メディアと会合の機会を持つ団体も出現した。加えて、今日では多くのアジア系アメリカ人が商業映画とは異なる形でインデペンデント映画を作成し、画一的なイメージを打ち破り、彼らの多様性を表現しようとする試みもある。(Ono and Pham 2009) 主要メディアは依然として強い力を持ちながらも、このような風潮を完全に無視することはできない状況にある。これらの動きは、リンのステレオタイプに該当しない描き方にも作用していると考えられる。

リンの積極的な表象は、依然としてアメリカ社会に色濃く残る差別や偏見を解消する上で重要な意味を持つ。彼女の優しい内面や仲間としての描かれ方は、中国系アメリカ人女性達はドラゴンレディのような攻撃的で相互理解が不可能な逸脱者などではなく、互いに助け合いながら共存できる人々であることを示している。また、訴訟社会に対して問題提起を行う姿は、マジョリティである白人のみが社会の課題を提示し改革を行うのではなく、マイノリティの彼女達もそのような力と権利を持つというメッセージを発している。これらの表象は、中国系アメリカ人女性に対する差別や偏見を解消する作用を持つだろう。また、このドラマの知名度を考えると、これからメディアに登場する中国系アメリカ人、ひいてはアジア系女性が、よりステレオタイプから脱却して描かれる可能性もある。彼女の表象はプラスに働く機能も内包しており、米国社会の多相性の描写にも繋がるのである。

補注

注1：リンが自ら「中国系アメリカ人」と表現しているため、彼女の出自をこのように表記する。

注2：自己主張をせず、男性に従順なアジア女性のステレオタイプも存在し、Lotus Flower、China Doll などと呼ばれる。

参考文献

- Beard, Charles Austin (1913) *An Economic Interpretation of the Constitution of the United States*, Macmillan. (『合衆国憲法の経済的解釈』池本幸三訳、斎藤真解説、研究社出版、1974.)
- Bellfante, Gina (1998, June 29) "Feminism: It's all about me!," *Time*, 54-62.
- Bhabha, Homi K. (1994) *The Location of Culture*, Routledge. (『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』、本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳、法政大学出版局、2005.)
- Hall, Stuart, ed. (1997) *Representation: cultural representations and signifying practices*, SAGE.
- Hammers, Michelle L. (2005) "Cautionary Tales of Liberation and Female Professionalism: The Case Against Ally McBeal," *Western Journal of Communication*, 69(2), 167-182.
- Herbst, Philip (1997) *The color of words: an encyclopaedic dictionary of ethnic bias in the United States*, Intercultural Press.
- Ono, Kent A. and Pham Vincent N. (2009) *Asian Americans and the Media*, Polity Press.
- Prasso, Sheridan (2006) *The Asian Mystique: Dragon Ladies, Geisha Girls, & Our Fantasies of the Exotic Orient*, Public Affairs.
- Patton, Tracy Owens (2001) "Ally McBeal and Her Homies: The Reification of White Stereotype of the Other," *Journal of Black Studies*, vol32, No.2: 229-260.
- Said, Edward W. (1978) *Orientalism*, Vintage Books. (『オリエンタリズム (上) (下)』、板垣雄三、杉田英明監修 今沢紀子訳 平凡社、1986.)
- Shah, Hemant (2003) "Asian Culture and Asian American Identities in US Television and Film," *Studies in Media and Information Literacy Education*, 3(3): 1-10.
- Shimizu, Celine Parrenas (2007) *The Hypersexuality of Race: Performing Asian/American women on screen and scene*, Duke University Press.
- Sun, Chyng Feng (2003) "Ling Woo in Historical Context The New Face of Asian American Stereotypes on Television," *Gender, race and class in media*: 656-664.
- The Commission on Freedom of the Press (1947) *A Free and Responsible Press, A General Report on Mass Communication: Newspapers, Radio, Motion Pictures, Magazines and Books*, The University of Chicago Press. (『自由で責任あるメディア：マスメディア (新聞・ラジオ・映画・雑誌・書籍) に関する一般報告書』、渡辺武達訳、論創社、2008.)
- Lippmann, Walter (1922) *Public Opinion*, Macmillan Company. (『世論 (上) (下)』、掛川トミ子訳、岩波文庫、1987.)
- 長谷川俊明 (1988) 『訴訟社会アメリカ 企業戦略構築のために』中公新書。
- 村上由美子 (1993) 『イエロー・フェイス ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』、朝日新聞社。
- 渡辺武達 (1995) 「メディアの公共性と公益性」、『評論・社会科学』第五十二号：81-198 同志社大学人文学会。